

節を受ける **le**, **ça**, \emptyset
— *dire*, *penser*, *savoir* の場合 —

山本 香理

0. はじめに

周知のとおり、節を代名詞化する場合は **le**, **ça** が用いられる。また代名詞化しない、いわゆるゼロ照応 (\emptyset) の場合もある。(1), (2) のように **le**, **ça** と \emptyset のどちらも容認される場合、(3), (4), (5) のようにその選択が制限される場合もある。また (6) のように代名詞の選択で固有の表現効果が生じることもある。

(1) — Paul rentre ce soir.

— Je **le** / \emptyset *sais*.

(Tasmowski-De Ryck, L. 1992 : 157)

(2) Antoine : Le capitaine m'a fait appeler... et m'a dit: « Ta mère est morte. Tu as trois jours de permission pour aller à son enterrement. Mais comme il ne pouvait pas me donner d'ordre de mission et que je n'avais pas assez d'argent pour payer le train, hé bien, je suis resté en prison.

M. Lucien : Bon, moi je *ne savais pas* **ça** / \emptyset .

(Truffaut, F. 1979, *L'amour en fuite*)

(3) — Manifestement, tu ne l'avais pas vue. Alors, où étais-tu, Doug ? Dis-moi au moins la vérité aujourd'hui.

— Susan, je te *l'ai dit* ce jour-là. Je te **le** *répète* aujourd'hui. La voiture était tombée en panne.

(Higgins Clark, M. 1991, *Recherche jeune femme aimant danser*)

(4) Sophie : Saunière ne cherchait pas à vous accuser. C'est à moi que son

message s'adressait.

Il faut à Langdon plusieurs secondes pour assimiler l'information.

Langdon : Vous pouvez me *répéter ça*, s'il vous plaît?

(Brown, D. 2003, *Da Vinci Code*)

(5) Assistante : Qu'est-ce-que t'as ? T'es malade ?

Nico : Je ne *sais pas*, *ça va pas*.

(Jacquot, B. 1997, *Le septième ciel*)

(6) Joséfa : Je croyais que t'étais pédé !

Otto : a. Qui c'est qui te l'a dit ?

b. Qui c'est qui t'a dit *ça* ?

※オリジナルは **b** の発話

(Guédiguian, R. 1995, *A la vie, à la mort!*)

本稿の目的は *le*, *ça*, \emptyset の使用条件を発話例の分析とインフォーマント調査⁽¹⁾に基づいて明らかにすることである。また上で挙げた代名詞が競合関係にある場合に生じる表現効果の違いについても考察したい。

本稿では考察の対象とする動詞を *dire*, *penser*, *savoir* とする。この 3 つの動詞を選んだ理由として、次の (7) から確認できるように、代名詞の選択について興味深い傾向が認められるからである。この傾向も考慮しつつ考察を進めていく。コーパスは、映画のシナリオと小説である。補助的に *Le Monde* も使用する⁽²⁾。

(7)⁽³⁾

	<i>dire</i>	<i>penser</i>	<i>savoir</i>
<i>le</i>	173	70	220
<i>ça</i>	134	5	13

1. *le* の場合

ここでは、どのような文脈で、話し手が事態を *le* で受けるかを明らかにす

る。また *le* を選択することで、話し手が何を表現するかを考える。

1.1. *dire*

主語が *je* の肯定文において現在形で *dire* を用いる場合、話し手は従節の事態を事実として、または事実である度合いが高いものとして述べることが多い。

(8) では Fabien の Blanche についての評価が問題になっている。Blanche は自分についての Fabien の評価が過大評価であると述べ、一方 Fabien は自分の評価が妥当であると主張している。そして Fabien は “*Et je te trouve très, très, très bien*” を *le* で受け、事実であることを保証している。Fabien は Blanche にこの事実を納得させようとしている。

(8) Blanche : *Mais je suis peut-être banale ! Ah... tu te fais une trop haute idée de moi !*

Fabien : *Mais pas du tout. Je me fais de toi une idée très haute et très juste. Et je te trouve très, très, très bien. Et je te le dis parce que c'est vrai.*

(Rohmer, E. 1986, *L'Ami de mon amie*)

次の (9) の *dire* の事行主体は発話時点以前の話し手である。しかし (8) と同じく事態を *le* で受け、その内容が事実であると聞き手に納得させようとしている。Susan は “*Dis-moi au moins la vérité aujourd'hui*” と述べていることから、Doug が以前述べた事態の内容に疑念をもっていることがわかる。そこで Doug は以前に述べた事態を *le* で受けて繰り返している。

(9) Susan : *Manifestement, tu ne l'avais pas vue. Alors, où étais-tu, Doug ? Dis-moi au moins la vérité aujourd'hui.*

Doug : *Susan, je te l'ai dit ce jour-là. Je te le répète aujourd'hui. La voiture était tombée en panne.*

(Higgins Clark, M. 1991, *Recherche jeune femme aimant danser*)

1.2. *penser*

主語が *je* の肯定文において現在形で *penser* を用いる場合、話し手は従節の

事態を自分の信念世界における事実として述べる。

(10) では, *Adrienne* が自分の友人について悪口を言っていると *Blanche* は解釈する。しかし *Adrienne* はそうではなく、友人とその恋人が不釣り合いであることを述べているのだと反論する。ここでは *Adrienne* は, *Blanche* の友人について述べた内容を *le* で受けることによって自分の信念世界において事実であることを明言している。

(10) *Blanche* : C'est ma meilleure amie, je n'aime pas qu'on dise du mal d'elle,
hein !

Adrienne : Oh, quelle sauvage ! Mais te fâche pas ! Je dis pas de mal d'elle !
Je dis simplement qu'ils sont mal assortis et je **le pense** !

(Rohmer, E. 1986, *L'Ami de mon amie*)

一方, *penser* を否定形で用いると, 事態が自分の信念世界において事実ではないということが伝わる。(11) はその例である。“*J'ai du mal à imaginer un quelconque changement profond et significatif*”と述べていることから、話し手が事態を自分の信念世界において事実ではないとしていることが確認できる。

(11) — *L'islam de France a-t-il changé de nature au cours des dernières années,
au point de représenter une menace pour la République ?*

— *Je ne le pense pas. J'ai du mal à imaginer un quelconque changement
profond et significatif.*

(LM 2003/07/02)

1.3. *savoir*

主語が *je* の肯定文において現在形で *savoir* を用いる場合、話し手は従節の事態を事実として述べる。

(12) では *Laurant* が 16 歳半であることが事実であるかどうかが問題になっている。*Hélène* は受付で *Laurant* のカルテを見たことから、彼の実年齢を知っている。*Hélène* は最後の発話で、今年の 10 月で 15 歳になるという事態を *le* で受け、そのことを事実として知っていることを、年齢を偽った *Laurant* に突き

つけている。

(12) Laurant : J'ai seize ans et demi.

Hélène : menteur ! Tu vas avoir quinze ans en octobre. Je **le** sais, j'ai demandé ta fiche à la réception.

(Malle, L. 1971, *Le Souffle au coeur*)

1.4. le のまとめ

以上のことから、ある事態の真偽を問題にしている文脈で、その事態を受けるのに **le** が用いられる。 *dire*, *penser*, *savoir* の事行主体が話し手で、現在形、肯定形で用いる場合、その事態が事実であると保証する。

2. ça の場合

上の (7) から確認できるように、 *dire* に関しては **le** と **ça** の使用頻度はほぼ同じである。しかし *penser*, *savoir* については、 **ça** を用いる頻度は **le** と比べて極めて低い。また **ça** が選択される場合の事行主体に着目してみると、(13) から認められるように、 *penser*, *savoir* については、発話時点における話し手以外である場合に **ça** が使用される傾向がある。事行主体が話し手である用例として確認できたのは (2), (14) の 2 件のみであった。これらの例においても、問題となるのは以前の出来事で、 *penser*, *savoir* の事行主体は発話時点における話し手ではなく、過去の話し手ということになる。

(13)

	je (I)	je(II)	tu	il	on	その他
<i>dire</i> (134)	16	17	65	16	3	16
<i>penser</i> (5)	0	1	2	1	0	1
<i>savoir</i> (13)	0	1	7	3	1	1

je (I) = 発話時点における話し手。

je (II) = 発話時点以外の話し手 (動詞は、複合過去, 半過去, 未来, 条件法)。

- (14) « Je t'avouerais, dit Roger, que je ne pensais pas, en t'invitant à déjeuner, subir le récit de tes ébats avec un petit jeune homme. (...) « Je suppose que tu vas me parler de mon âge? — Paule... » (...) « Paule... tu sais très bien... J'ai été ignoble. Je te demande pardon. Tu sais que je ne *pensais pas ça*.

(Sagan, F. 1959, *Aimez-vous Brahms...*)

ここでは、どのような文脈で、話し手が事態を *ça* で受けるかを明らかにする。また *ça* を選択することで、話し手が何を表現するかを考える。そして最後に *penser*, *savoir* と共に用いる場合、事行主体が制限される要因を考える。

2.1. *dire*

dire の使い方は大きくわけて 2 つあると考えられる。

まず従属節内の事態にポイントをおく場合である。その場合、事態の真偽が問題になり、その事態を受けるのに *le* を用いる。

またある事態を伝えるという行為つまり主動詞 *dire* の表す事行にポイントをおく場合である。その場合、従属節内の事態の真偽は問題にしない。そしてその事態を *ça* で受ける。

例えば (15) のように、事態が話し手と聞き手のあいだで了解されていない場合である。ト書きの “ Il faut à Langdon plusieurs secondes pour assimiler l'information ” から、Langdon は Sophie の述べた事態を十分に把握できていないことが確認できる。Langdon は事態の真偽を問題にしているのではなく、Sophie にその事態を繰り返すように求めている。そしてその事態の表現形式を *ça* で受けている。

- (15) Sophie : Saunière ne cherchait pas à vous accuser. C'est à moi que son message s'adressait.

Il faut à Langdon plusieurs secondes pour assimiler l'information.

Langdon : Vous pouvez me *répéter ça*, s'il vous plaît?

(Brown, D. 2003, *Da Vinci Code*)

次の例についても “ *je dis ça* ” で話し手は “ *je te trouve très, très, très bien* ”

の事態が事実であると示しているのではない。事態が事実であるかどうかは問題にせずに、この事態を伝える *dire* の事行にポイントをおいている。そして *ça* は事態の表現形式を受けている。

(16) Et je te trouve très, très, très bien, quand je *dis ça*, je le pense vraiment.

(17), (18) のように実際は事態の真偽が問題になっている場面で、話し手は事態を受けるのに *ça* を選択することがある。ここでは、表現形式を受ける *ça* を用いることで話し手は積極的に事態を問題にしない姿勢を明示し、事態を事実であると受け入れていないことを示す。そこから驚き、憤慨、不満といった表現効果が生じる。

“je n’ai jamais dit que j’aimais mentir !” と述べていることから Catherine は Antoine の述べた事態を事実であると受け入れていないことがわかる。そして事態の表現形式を *ça* で受けつつ、そうした事態を述べたことはないことにポイントをおいている。

(17) Antoine : Vous êtes une drôle de fille, Catherine.

Catherine : Pourquoi?

Antoine : Parce que vous qui aimez tant le mensonge... (...)

Catherine : Mais je n’ai jamais dit que j’aimais mentir !...

Antoine : Pourtant hier, vous disiez...

Catherine : Je n’ai jamais *dit ça*, vous n’entendez que ce qui vous arrange.

(Vincent, C. 1990, *La Discrète*)

親友の Antoine から絶交を言い渡された Fred はその発言の内容を事実として受け入れることができずにいる。そして Antoine の発言の表現形式を *ça* で受けつつ、なぜそうした発言をするのかという行為にポイントをおいている。

(18) Antoine : Je veux plus te voir. Je veux plus qu’on se voie. On se voit plus, c’est fini tout ça.

Fred : Pourquoi tu me *dis ça*, mais pourquoi tu me *dis ça* ? Mais qu’est-ce que j’ai fait? Antoine, Antoine...

(Salvadori, P. 1995, *Les Apprentis*)

2.2. *penser*

penser についても、主動詞 *penser* の事行にポイントをおく場合に *ça* が選択される。

(19) では “*Elle s’est mise en tête des choses impossibles à propo de son père*” や “*D’après elle, il se serait suicidé*” のなかで条件法を使用していることから *Belle-mère* が事態を事実ではないと考えていることがわかる。またこの発言をうけて、*Nico* も事態を *ça* で受けていることから、事態を事実であると容認していないことがわかる。そしてなぜそうした事態を事実であると考えに至ったかという *elle* の行為にポイントをおいている。

(19) *Belle-mère* : *Je dois dire qu’elle me donne du souci... Elle s’est mise en tête des choses impossibles à propos de son père...*

Nico : *Ah bon...*

Belle-mère : *D’après elle, il se serait suicidé.*

Nico : *Comment elle en est venue à penser ça ?*

(*Jacquot, B. 1997, Le septième ciel*)

2.3. *savoir*

savoir についても、*savoir* の事行にポイントをおく場合に *ça* が選択される。

Zaza は “*Devine...*” と述べていることから、*René* が彼らは何歳であるかを知らないことを想定している。しかし、*René* が彼らの年齢を言い当ててしまう。そこで “*Ben, comment tu sais ça toi ? !...*” の中で *Zaza* は彼らが 21 歳と 19 歳であるという事実よりも、むしろ *René* がその事実を知っているという *savoir* の表す事行にポイントをおいている。

(20) *René* : *.... Ils ont quel âge ?*

Zaza : *Devine...*

René : *vingt-et-un et dix-neuf...*

Zaza : *Ben, comment tu sais ça toi ? !...*

(Ferran, P. 1996, *Petits Arrangements avec les morts*)

2.4. 事行主体の制約

話し手が *ça* を選択するのは、従属節内の事態の真偽を問題にせずに、主動詞の表す事行にポイントをおく場合であることを確認した。事行主体が話し手で、現在形、肯定文で用いる場合、*dire* に関しては、そうした意図で発話を構成することが可能であることを確認した。しかし *penser*, *savoir* については、1章で述べたように、話し手は従属節内の事態を事実であると保証することから、必然的に事態を問題にすることになる。“*je pense que ...*”, “*je sais que ...*” によって事実として提示することと、事態に対して真偽を問題にしない、または事実であると評価しないことを表す *ça* は相容れないのである。

2.5. *ça* のまとめ

話し手が従節の事態ではなく、ある事態を伝達、思考、認知するという主動詞の表す事行にポイントをおく場合、事態の表現形式を受けるのに *ça* を選択する。ここでは事態が事実であるかどうかは明らかにしない。

このことから、冒頭で挙げた (06) に関して、事態を *le* で受け、事態にポイントをおいていることから (06a) は話し手が *Josépha* が述べた事態を事実であることを認めていることがわかる。一方 *ça* を使用する (06b) は *Josépha* が述べたことが事実であるかどうかは明らかにしていない。

3. *le*, *ça* と \emptyset の違い

le, *ça* と \emptyset の競合関係は疑問文の回答のなかでよく見受けられる。次の例は *le* と \emptyset が競合する例である。

(21) — Mais pourquoi n'a-t-il pas signé sa toile, ton maudit peintre?

— Je ne *le* / \emptyset *sais pas* encore, et c'est justement pour *ça* que j'ai besoin de toi.

(Levy, M. 2004, *La prochaine fois* : 138)

この (21) のような部分疑問文に対する回答の場合ではなく、全体疑問文に対する回答の場合の *le* の使用は、(22) のような否定文では容認されない。(23) のような肯定文なら容認される。

(22) — T'es malade ?

— Je *sais* pas, ça va pas.

(23) — T'es malade ?

— (plaisanterie) Oui, je **le** *sais* bien.

部分疑問文の場合、事態の一要素が問われている。よって否定文で答える場合、その事態の一要素について無知であることを示すのである。この場合 *le* で事態を受けることができる。一方、全体疑問文の場合、聞き手は *oui* か *non* かの選択を迫られている。そして否定形で答える場合、聞き手はどちらか一方の事態を選択できないことを示している。ここでは、聞き手は2つの事態を想起しており、それらを *le* で受けることはできない。一方、肯定文で答える場合、聞き手はどちらか一方の事態を選択するので、その事態を *le* で受けることに問題はない。

このように複数の事態が想起され、あるひとつの事態を問題にできない場合は *le* による照応は難しいと考えられる。このことは (2) が *le* ではなく *ça* による照応のほうがふさわしいことから確認できる。

さらに \emptyset が容認されやすいケースとして、動詞の意味も関係してくる。

次の (24) も *le* と \emptyset どちらも容認されるが、インフォーマントによると、表す意味はほぼ同じだが、 \emptyset の場合は *penser* の意味が弱いと感じるとのことである。

(24) — Et tu estimes que le savoir enseigné dans les Universités bourgeoises est
une bonne préparation aux luttes révolutionnaires?— a. Oui, je **le** *pense*. Le savoir est toujours le savoir.

b. Oui, je *pense*. Le savoir est toujours le savoir.

(Merle, R. 1970, *Derrière la vitre*)

ではこの \emptyset の場合に *penser* の意味が弱いと感じるのは何によるものだろう。

croire, *penser*, *savoir*, *trouver* といった思考・認知動詞は、本動詞としてではなく、命題に対する心的態度を表すモダリティ表現として機能することがある。Andersen, H-L. (1996) は、そうした動詞をモダリティ表現として用いる場合、事行対象との結び付きが弱くなることから、事行対象の事態の代名詞化は不自然であると述べている。例えば *croire* が (25) のように本動詞として用いられる場合、事行対象の事態を代名詞化する場合 *le* で受けることができる。しかし (26) では *croire* は “à mon avis” のような命題に対する評価といったモダリティ表現で用いられており、事行対象の事態を代名詞化することは容認されないと指摘している。

(25) — Moi, je crois que Jésus est vivant.

— Tu **le** crois vraiment.

— Oui je **le** crois fermement.

(26) — Euh je sais je crois j'avais treize ans...

— Tu *crois*?

— Oui, je *crois*.

(Andersen, H-L. 1996 : 310)

4. おわりに

本稿では *le*, *ça*, \emptyset の使用について次のことを確認した。

- 1) 事態の真偽が問題になっている文脈では、その事態が事実であることを保証する場合、*le* を用いる。
- 2)a. 事態の真偽ではなく主動詞の事行の方にポイントをおく場合は、*ça* を用い

- る。 *ça* は、事態の表現形式を受けると考えられる。
- b. 事態の真偽が問題になっている文脈でも、事態を事実として受け入れていない姿勢を示す場合、 *ça* を用いる。
- 3)a. 全体疑問文に否定形で答える場合、 \emptyset を用いる。
- b. 思考動詞・認知動詞をモダリティ表現として使用する場合は、 *le* ではなく \emptyset を用いる。

注

- (1) 出典を示していない発話例、 a, b と複数の発話が表示してある場合はインフォーマントの協力を得てわれわれが作成したもの。オリジナルは a の発話。インフォーマントはフランス人 2 人。
- (2) データは、西村牧夫先生 (西南学院大学) に提供していただいたものが非常に有益であった。
- Le Monde* は CD-ROM を使用。略号は LM。
- (3) コーパスは映画のシナリオ、小説。そのなかから 4000 件の発話例を無作為に抽出。

参考文献

- ANDERSEN, H-L. (1996) : “Verbes parenthétiques comme marqueurs discursifs”, *Dépendance et intégration syntaxique —subordination, coordination, connexion*, éd. MULLER, C. Max Niemeyer Verlag. pp. 307-315.
- BOONE, A. (1996) : “Les complétives et la modalisation”, *Dépendance et intégration syntaxique —subordination, coordination, connexion*, éd. MULLER, C. Max Niemeyer Verlag. pp. 45-51.
- BLANCHE-BENVENISTE, C. et alii. (1984) : *Pronom et syntaxe L’approche pronominale et son application au français*, Paris, SELAF.
- CHARAUDEAU, P. (1992) : *Grammaire du sens et de l’expression*, Hachette.
- DUCROT, O. et alii. (1980) : *Les mots du discours*, Paris, Minuit.
- GREVISSE, M. (1986) : *le bon usage Grammaire Française*, Duclot.
- LE GOFFIC, P. (1998) : *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.
- LE QUERLER, N. (2001) : “Le pronom clitique *le* est-il toujours d’un emploi libre dans le système comparatif du français ?” , *Clitique et Cliticisation*, Paris Honoré Champion Éditeur,

pp. 177-190.

MARTIN, R. (1987) : *langage et croyance*, Pierre Mardaga.

NOAILLY, M. (1998) : “Emploi absolu, anaphore zéro et transitivité”, *La transitivité*, Actes du colloque de Lille : *La transitivité*, novembre 1995, éd. A. ROUSSEAU, Presses Universitaires du Septentrion, pp. 131-144.

TASMOWSKI-DE RYCK, L. (1992) : “Le verbe transitif sans complément”, *Travaux de linguistique et philologie* 30, pp.157-170.

朝倉 季雄 (1981) : フランス文法ノート—基本語の用法—(白水社).

—— (2002) : 『新フランス文法事典』(白水社).

(博士課程後期課程)